建築計画研究室

Architectural Planning Lab.

朽木 順綱

KUTSUKI, Yoshitsuna / Associate Professor

都市の中に埋まる身なり　電車の窓に映る風景

Appearances buried in the city

電車の窓から見える都市を対象とした作品である。

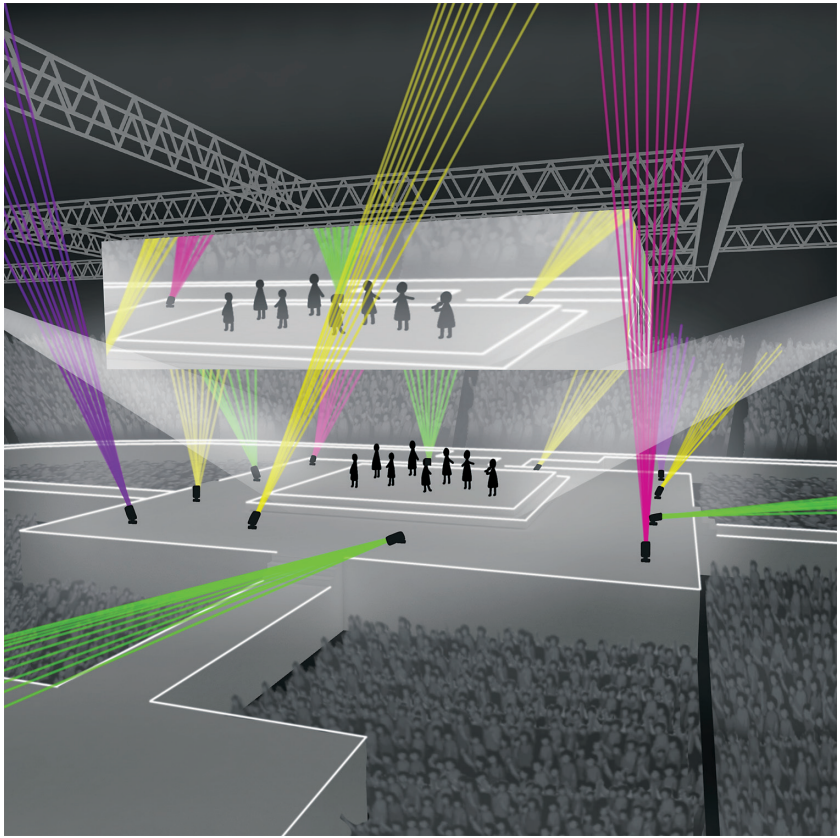
現在の都市は区画化された道、整理された機能といった効率的で使いやすいものである。それと同時にその場特有の風景を失ってしまった。いわゆる均質的である。しかし、その均質的な風景にも確かに人は住み、使い、日々を暮らしてる。そんな都市を使いこなす人々の様子を表出させ都市を風景から捉えなおす。

バブル期のようなものではない、その場生まれの身なりで彩られる都市が見えてくるはずだ。

前田 耕汰郎
MAEDA, Kotaro

FAN to fan

FAN to fan



もし、テレビの中に好きな人が居たら1度は会ってみたいと思う人が大半だろう。ましてやそれがアーティストであれば、コンサートで歌を聞いてみたい、近くで見てみたいと思うのは当然である。

しかし、折角コンサートに足を運んでも、座席が遠い時と近い時では終演後の満足感に違いが生まれてしまう。

そこで、これまでに様々なコンサートに足を運んだ経験を生かし、遠い席でもアーティストが近くに感じられる演出や構成のコンサートを計画した。

石橋 歩実
ISHIBASHI, Ayumi

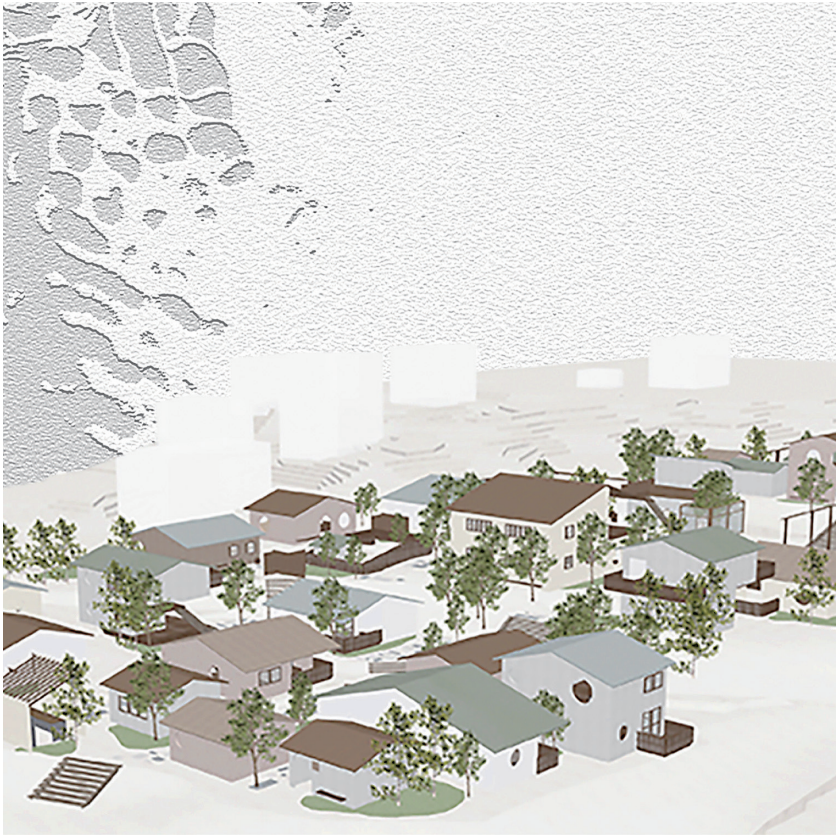
犬と私のいつものサンポミチ　～新しい動物愛護センターの形～

Everyday promenade for dogs and me: A new form of animal protection center

ここは兵庫県西宮市、六甲山の麓。
この施設は身勝手な理由で行き場を無くした犬たちが暮らしている。
繁殖犬として過ごしていた犬、野良犬として育ってきた犬、飼育放棄された犬など様々な理由を持っている。

大半の犬たちは人の温かさを知らない。
そして犬らしい生活を送ったことがない。
少しだけでもいい。
ドライブの合間でも、夜景を見る途中でも。
散歩のついでに寄るような場所でもいい。
犬たちと触れ合い人の温かさを伝えてあげてほしい。
そしてふれあいを通じて家族になり、一緒にこれからの道を歩んでほしい。

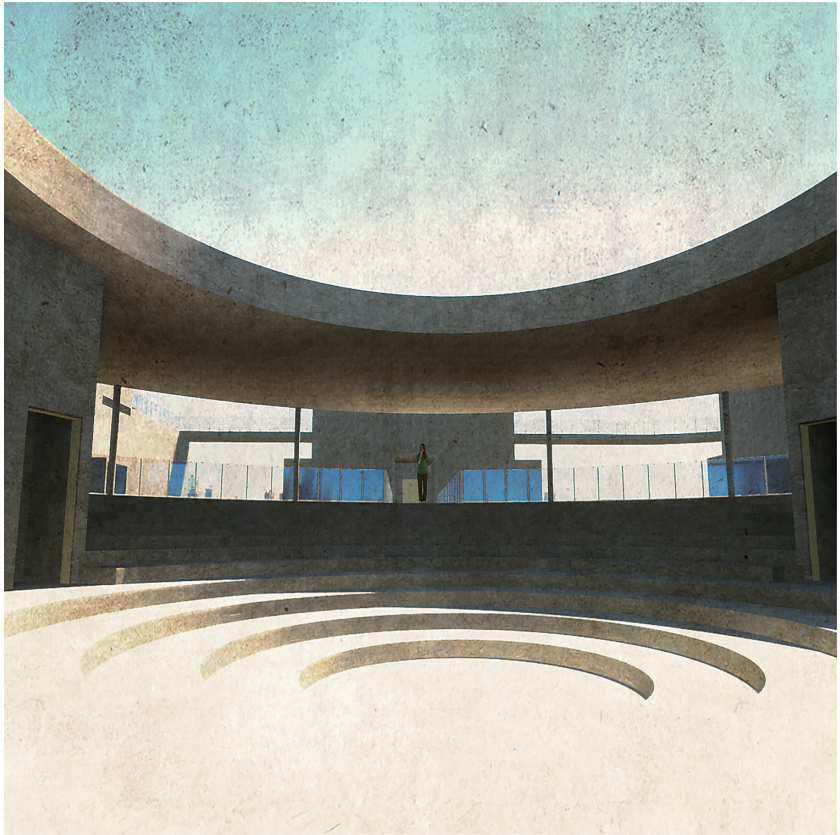
「じゃあね」ではなく、
「また一緒に来ようね」と言ってもらえる場所になることを願う。



泉谷 涼夏
IZUMITANI, Suzuka

死を呑む大地　自然に還るための非燃焼樹木土葬

Earth swallowing death: Non-burning tree burial to return to nature



すべての生物は死を迎え、その死体は他の生物の養分となる。

しかし、現在の日本で行われている葬法は９９．９％が火葬であり、火葬はその自然の流れから逸脱している。たとえ人間であっても他の生物たちと同じく、遺体を大地へと還すことが本来のあるべき姿ではないだろうか。私は遺体を全く焼かない、本当の意味で自然に還ることのできる新しい葬祭場を提案する。

本提案では、亡くなられた方の遺体を臓器と身体に分け、臓器は動物や虫などの山の生物の養分に、身体は樹木の養分に、それぞれを別々の方法で自然の中へと還元する。また臓器と身体を分け、弔いの工程を増やすことで、死と向き合う時間や故人との別れを告げる時間を増やすことが可能となる。

河合 遼我
KAWAI, Ryoga

新和歌浦水景　かつての観光地の医療リゾート計画

The Shinwakanoura waterscape: Medical resort plan for former sightseeing spots

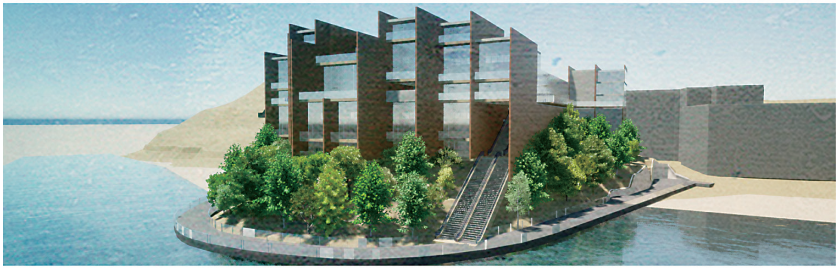
古くは万葉の時代から景勝地として栄えた「和歌山県　新和歌浦」。多くの歌人がこの地の美しい海景と夕日に魅せられ、多くの歌が詠まれてきた。

その豊かな自然景観を生かして、明治～昭和に観光地開発され、多くの観光客が訪れた。旅行の多様化によって観光客が白浜に流れて減少し、現在では多くの旅館が看板を下ろし廃墟と化している。

そこで、今も残る美しい海岸線と観光遺産を活用して「医療」と「リゾート」を融合した「滞在型医療リゾート」を計画する。

かつての旅館跡地と観光遊歩道を中心に「健診・検診」「リハビリテーション」「健康療法」分野を配し、新たな形の医療ツーリズムを提案する。

美しい海景を望みながら、豊かな体と心を取り戻す。医療リゾートが廃れた観光地に人を呼び込み、地域活性化も担う。



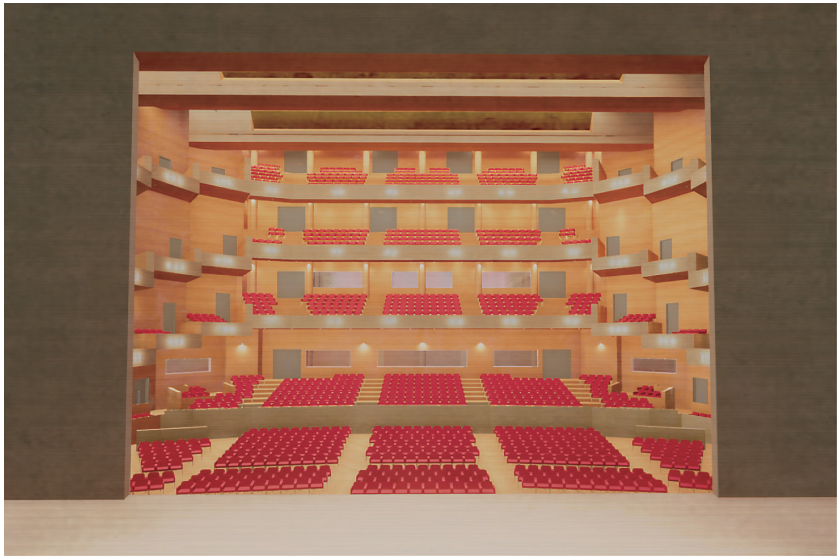
建築部門賞

川端 哲平

KAWABATA, Teppei

虚構と現実　大衆化する劇場

Fiction and real: Popularizing the theater



演劇とは現実で観る虚構だ。しかし現実を生きる私たちも、日々何かを演じながら生きている。演劇が虚構なら私たちが何かを演じているこの世界も、現実ではなく虚構なのかもしれない。

近代化によって演劇という文化が衰えつつある。建物の高層化により劇場はビルの中に収まり、またその多くはチケットを持っていない限りホール空間に入ることもできず、人々は日常的に演劇について知る機会が少ない。

そこで演劇の文化が根付いている日比谷に、新たな形を持つ劇場を提案する。ふと劇場に立ち寄った人が、演目を比べ、選び、その瞬間に観ることができる。そのたった1回の偶然が演劇という文化を広めるきっかけになればいい。

虚構と現実が混じり合う空間で、人と演劇は幾度も重なり合う。そのとき初めて人は演劇という文化の重要性を再認識するだろう。

相良 恵梨
SAGARA, Eri

音と風景　城下町に音楽の風を

Sound and Scenery: Bringing the wind of music to the castle town

敷地とする近江八幡の城下町は、たくさんの音で溢れている。

観光客の賑わう声、お堀を巡る船の音、水の音、山から聞こえる風の音。

しかし今では、その賑やかな音は町の一部でしか聞こえない。

かつて近江八幡は商人の街として栄えていたが、今では多くの店が開かれておらず閑静な通りが目立つ。

そこで、何度も同じ道を通ったような不思議な感覚がするありふれた町の風景に音楽を取り入れ、人々が自然と集まるような音楽の町を設計する。

下郷 まみ
SHIMOGO, Mami

負戎の神像

A statue of negative things created by mankind

古来人類は、神や自然と共存し、その世界では人間の心にゆとりがあった。しかし近代、人類は世界から神や自然を排除し、人間主体の世界をつくりだした。その結果、物質的な繁栄とひきかえに、精神的なゆとりの枯渇を生んだ。

物質的繁栄は人を、世界を傷つけるものさえも生みだしてしまう。犯罪、SNSでの言葉の暴力、病気などの「負」や、戦争、兵器、核などの「戎」が生まれた。

今、これらの象徴となる像として、「負戎の神像」を建てる。また、それらの消滅の場として「祈りの場」を建てる。

草花に「涙」と呼ばれる水を与え育てることを祈りとする。人々の祈りは草花に力を与え、やがて神像を覆いつくすほど成長するだろう。そのとき、この場には鳥や虫が訪れるようになり、この世界は再び人類と自然が共存しはじめる。

「負戎」の消滅を願い、自然と共存するこの場は人々の心にゆとりを生み、現代の窮屈な世界にもゆとりをもたせるきっかけとなるだろう。

辻本 陽基

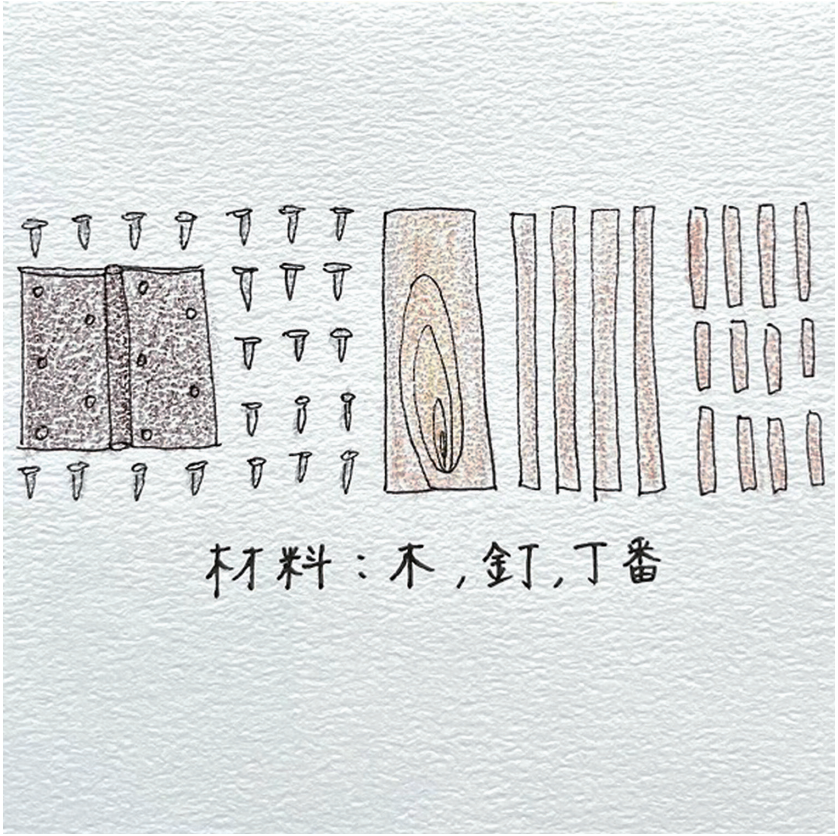
TSUJIMOTO, Haruki

My experience　～好きにさせて～

My experience: Let me do what I want

４年間の学生生活は私にとってかけがえのない貴重な時間であり、高校生のときにできなかったことや新しく興味を持ったことを数多く経験できました。しかし写真や使用済みのチケットは溜まっていく一方でそれらをなかなか振り返らないことに気が付きました。

体験したことを記憶に留めず可視化させたいと思い、趣味嗜好の変化や4年間の思い出を詰め込んだ空間を本棚で表現しました。４年間で体験したことを作品にしているので参考にしていただきたいです。

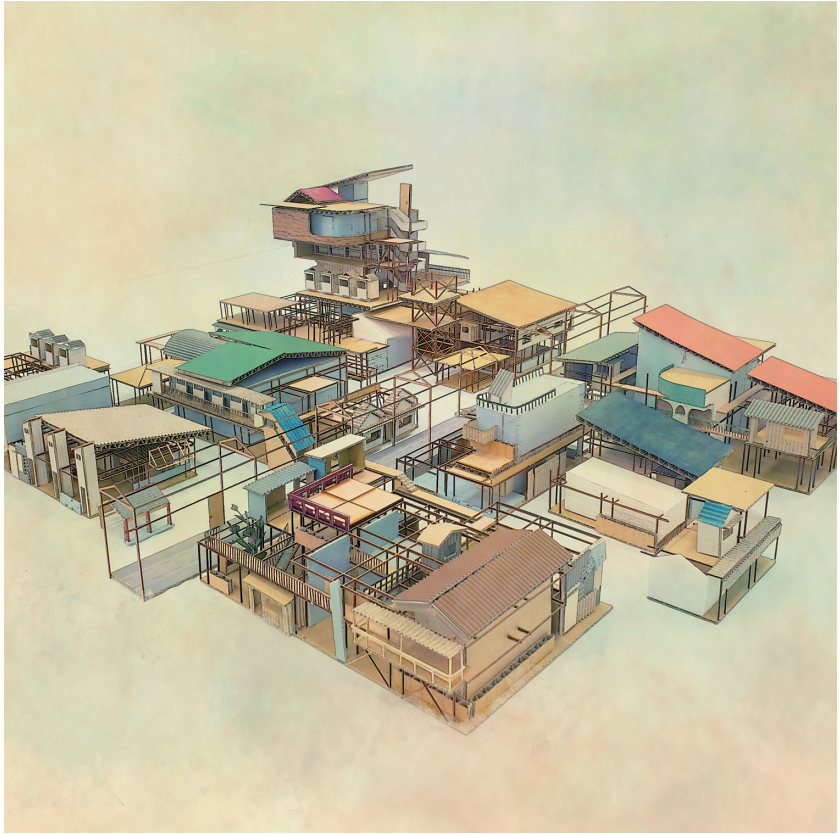


野々村 吉華

NONOMURA, Kikka

かそけきの町　平野が紡ぐ小さな風景

Ephemeral townscapes: Hirano ward reorganization plan



大阪市平野区には、戦前から発展し現在にもその痕跡が残る地域が存在する。しかし、時代と共に、豊かな生きられた風景を残す町は均一な住宅街へと姿を変えつつある。そこで、小さな物語があふれる町の消滅を食い止め、人々によって日々更新され続けるための骨格を提案する。

現在残された平野の風景を形づくる風景の要素を抽出し、骨格に反映させた。その空間は日々のさりげない活動を鼓舞し、個人の居場所を少しずつ引き延ばさせる。そして、個人の居場所は他者を巻き込みながら成長を続ける。

そこに生きる人々が生み出す小さな風景が町を形づくっていく様子を未来の記録として描いた。

審査会賞
（建築部門 第1位）
特別審査員賞（伊倉泰賞）

松本 明莉
MATSUMOTO, Akari

街を醸す　クラフトビールによる繊維工業団地再編計画

Brewing the city: Reorganisation of textile industrial park by craft beer breweries

繊維の街として発展したこの街は、時代が進むにつれて様変わりした。

1960年頃、この街 - 大阪府箕面船場団地は繊維商品の流通業務の効率化や高度化を目的とし、大阪市船場地区に続く第二の大阪の繊維の街として計画された。卸商人が集い、トラックが行き交う街は、やがて生産者と消費者が賑わう街へと発展した。

しかし現在、ひび割れた道路や空きビルが見られ、日中の人通りの少なさはどこか寂れた印象を受ける。そこで街の再編化を目指し、歴史や建物の継承、消費者と生産者の繋がりを生み出すブルワリーを計画する。

ある日、空き地にできた小さなビール工房は、向かいのビルの一角を、次にその隣のビルの一角を……そうして街の一角を借りながら増築する。工房は道へ広がり、街へ広がる。そこで働く人やたまたま立ち寄った人、豚や鳥、柚子や桃、いろんなものを巻き込み街を醸しだす。

森 星奈
MORI, Seina

まちをつくる　常盤橋再開発

Creation of a city block: Redevelopment of Tokiwabashi area, Tokyo

まちをつくる。

東京都千代田区。
再開発が進むこの地区は、
かつての親水空間の賑わいを取り戻す為
2040年までに首都高速地下化が計画されている。

景観を取り戻した日本橋と、
再開発によりビルが立ち並ぶ大手町の
架け橋となるようなまちをつくる。

空、緑、地、水、を楽しむ豊かな空間を創出し、
訪れた人々が従来の文化施設と異なる建築空間で
世界と繋がることができる。

審査会賞
（建築部門 第3位）

吉岡 莉乃
YOSHIOKA, Rino